

多 ま な び

 **放送大学** 東京多摩学習センターだより第26号 2021年4月発行



「多摩の風景 9—御岳山—」 齋藤文孝

発行 放送大学東京多摩学習センター 〒187-0045 東京都小平市学園西町 1-29-1

TEL : 042-349-3467 E-mail : tama-sc@ouj.ac.jp URL : <https://www.sc.ouj.ac.jp/center/tama/>

ようこそ、東京多摩学習センターへ！

東京多摩学習センター所長
五味 政信



放送大学へのご入学、おめでとうございます！

学生の皆さんお一人お一人がそれぞれの学びを確実に前に進め、所期の目的が達せられるよう、私たち教職員全員でサポートする体制を整えていますので、皆さん、存分に学び、研究し、教員や学友と議論していただきたいと思います。

放送大学には全国で9万人弱の学生が在籍し、全国にある50の学習センターに所属して勉学・研究に励んでいます。私たちの東京多摩学習センターは、2002年に50番目に創設された若い学習センターで、昨年11月現在、3,398名の学生の皆さんが在籍しており、全国で8番目前後の規模をもつ学習センターとなっています。

放送大学の最大の特徴は「多様性」にあると言われます。在籍する学生の皆さんが、年齢構成も職業構成も多様性に富んでいるという点での「多様性」とともに、授業科目、担当教員の「多様性」も私たちの大学を特徴づけています。放送大学は、教養学部の中に教養学科があるという、いわゆる単科大学ですが、皆さんのお手元に届いている『面接授業開設科目一覧』の授業科目名を見ただけでも、科目の構成は総合大学のようにも感じられ、学べる科目が多岐にわたっていることが分かります。

「教養」という語は急速に変化する現代社会において、たいへん重要な語となっています。立命館アジア太平洋大学学長の出口治明氏は「今後、どの仕事が無くなり、どんな新しい仕事が出てくるかは誰にも予測できませんが、『考える力』や『探求する力』『問いを立てる力』がもっと必要になるのは確かです」と書いています（『自分の頭で考える日本の論点』幻冬舎）。また、出口氏は別の本で、教養とは人生を面白くするツールであり、生き抜くための最強の武器だということも述べていますが、この「教養」こそが「考える力」や「探求する力」「問いを立てる力」の源であると思います。皆さんが放送大学で多くの知識を獲得し、それらを有機的に結び付け教養に昇華することを実現するお手伝いができるよう私たちは準備しています。

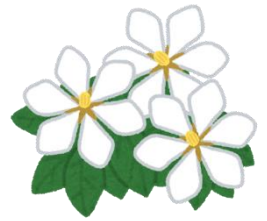
この3月に東京多摩学習センターから巣立った学部卒業生、大学院修了生の合計は211名でした。そのうちのお一人、Nさんから手紙をいただきました。



「放送大学で学んだことを活かし、教養学部学士」とともに「学位授与機構で看護学の学士、心理コースで認定心理士も取得」「放送大学のおかげで、私の人生は何倍にも大きく広がり…まるで夢のようで、放送大学での学習、面接授業は楽しくて仕方ありませんでした。」

Nさんが放送大学での学びを楽しみ、自らの人生を切り拓き、所期の目的を達せられたことは、私たち教職員の喜びでもあり、大いに励まされることでもあります。コロナ禍の中ではありますが、東京多摩学習センターをできる限り活用していただき、新入生の皆さんがそれぞれの学びを前進させ、その喜びを私たちも共有できることを心から願っています。

新任のご挨拶



東京多摩学習センター客員教授 糟谷 啓介（かすや・けいすけ）

今年度、東京多摩学習センターで客員教授・及び面接授業を担当することになりました。一昨年度も面接授業を担当しましたが、放送大学の学生さんたちの熱心に勉学に励む姿が、つよく印象に残っています。再び学生みなさんと出会うことができ、たいへん嬉しく思います。

わたしの専門は言語社会学という分野です。言語と社会との結びつきは、言語が成り立つ本質的な条件のひとつです。言語のない社会がありえないのと同様に、社会のない言語もありえません。言語学の観点からみれば、すべての「言語」は平等です。しかし、その「言語」が特定の社会の文脈に置かれると、なぜ言語の間に上下関係が生まれ、さまざまな社会的問題をひきおこすのでしょうか。言語社会学はこうした問いに取りくみます。

わたしたちにとって言語はあまりに身近なものであるので、普段は言語の存在に気付きにくくなっています。面接授業では、そこを一步立ち止まって、みなさんといっしょにわたしたちにとっての言語の意味を考えていきたいと思います。



東京多摩学習センター客員教授 金沢 篤（かなざわ・あつし）

本年4月より東京多摩学習センターの客員教授を拝命した金沢篤です。本務校は駒澤大学、仏教学部の所属です。インドの古典語であるサンスクリット語に魅せられ、インド古典の解説とインド文化・思想の研究を専門としていますが、同時に近現代世界のインド受容にも興味津々です。

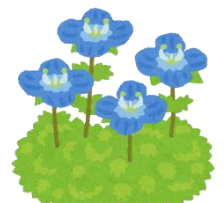
本年当学習センターでは「初めてのサンスクリット語」（前期）、「仏教入門」（後期）という面接授業を担当させていただきます。また、「マハーバーラタを読む」という多摩ゼミの開講（前期）も予定しています。日本人の生活に深く染み込んだ仏教がインド起源の宗教であることはご存じでしょう。仏教の展開と不可分であるかの日本文化を存分に享受するためにも、仏教を正しく理解し、インドの歴史と文化への関心をうまく育む必要があります。一筋縄では行かないかとも思いますが、とても楽しい作業です。是非とも、共に学び、そして大いに議論の花を咲かせたいものです。



東京多摩学習センター客員教授 小泉 順也（こいずみ・まさや）

東京多摩学習センター客員教授を務めることになりました小泉順也です。専門分野はフランス近代美術史で、印象派に続く、19世紀末から20世紀初頭にかけてのポスト印象派やナビ派を主要な研究対象としています。また、価値を認められた文化財や美術作品だけでなく、その途上にある文化資源と呼ばれる曖昧な資料にも関心があります。

普段は学芸員資格の取得を目指している大学院生に博物館学を教えているため、美術館に限らず、歴史博物館、自然史博物館、科学博物館、動物園など、広義の博物館を見て回ることを心掛けています。すべての博物館が素晴らしいわけではありませんが、どこであっても何かしらの気付きや学びは得られます。資料や作品を通した実物教育の場として、身の回りにある博物館を意識してみてください。例えば、学習センターの近くには小平市平櫛田中彫刻美術館、少し離れた所に小平市ふれあい下水道館があります。興味を持った方はお立ち寄りください。



退任のご挨拶



東京多摩学習センター客員准教授 鈴木 令子（すずき・れいこ）

この一年は、緊急事態宣言に伴う入構制限などがあり、ゼミや学習相談など何もできず残念でした。

面接授業のみ少ない人数でも実施できましたが、受講生は例年以上に主体的に参加されていたように思います。

インターネットとクラウドサービスが普及してきた時代に、世界的パンデミックが起きたことは、人々の社会参加の形態変容を一気に加速させました。

まだ利用が普及していなかった、オンラインあるいはリモート（会議、授業、実験、ミーティング、飲み会、、、）は世界的規模であつと言う間に広がりました。

未だコロナは終息を見せず、明日の予想がつきません。

面接授業は行う予定でおりますので、無事に実施できることを祈っています。



東京多摩学習センター客員教授 中野 知律（なかの・ちづ）

放送大学東京多摩センターで客員教授を務めさせていただいて5年が経ちます。就任のご挨拶に伺った日には、教員として初めて着任した一橋大学小平分校の校舎跡に建つセンターの窓からかつてと変わらぬ大樹の姿が眺められ、時が止まっていたかのような不思議な気持ちになりました。

しかしながら、放送大学の入学式、修了式、面接授業そして多摩ゼミナールで、知への真摯な熱意に満ち豊かな人生キャリアをふまえた学生の方々とご一緒させていただくなか、この小平の地において日々新たな時が刻まれ蓄積されてきたことを実感いたしました。いつからでもいつまでも志をもって学びの道を歩んでいける場があるということのすばらしさを教えていただき、感謝しております。多摩センターの職員の皆さまにもずっと細やかなお導きを賜り、心より御礼申し上げます。新年度を迎え、学生のみなさまがさらに素敵な学びの絆に出会われますように。



東京多摩学習センター客員准教授 姫野 敦子（ひめの・あつこ）

客員教員の姫野敦子です。

2020年4月から2021年3月まで、短い期間でしたが、無事に客員教員の任務を終えることができました。Covid-19 感染防止のため、多摩学習センターに来校できたのは、11月18日から12月9日のたまゼミのみでした。「能「葵上」を読む」と題したこのゼミは、初めての様々な感染予防策、アクリル板、フェイスシールドなどを準備してもらいました。かなり、ものものしい様子ではあったのですが、参加者の熱心な授業態度に助けられました。

また、茶道部の顧問だったのですが、センターでのサークル活動はできないということで、部員の皆さんは、Zoomを使って交流をしていました。パソコンの画面の向こうで、それぞれにお菓子・お茶をいただいたのは在宅が続く中でのほっとした一時でした。2021年度には、たま祭でお茶会ができること、また学生の皆さんが学習センターでの活動を再開できることを祈っています。また会いましょう。ありがとうございました。



お世話になりました、ありがとうございました

東京多摩学習センター前事務長
坂下 至宏



平成 26(2014)年 4 月から縁あって 5 年ぶりに再び事務長としてお世話になりました。おかげさまでこの 3 月末、無事任期満了を迎えることになりました。平成 16 年 10 月からの 2 年半の在職期間を加えると、都合 9 年半もの長きにわたり放送大学東京多摩学習センターのお世話になったことになります。

東京多摩学習センターは、平成 13(2001)年 10 月に開設準備室が設置され、翌年 4 月から全国で 50 番目に設置された学習センターとして学生の受け入れを開始、今秋で開設準備室設置 20 年になります。その歴史の大半に私は関わらせていただいたことになります。

在職期間が長いだけで胸を張れる実績があったわけでもなく、常に学生の声に耳を傾け、できる限り学びやすい学習環境を提供しサポートさせていただく、また、職員が日々明るく勤務できる職場環境を作る、ということが私の重要な責務と位置づけ勤務した毎日で、気が付けば任期満了を迎えていた、というのが今の実感です。

いつも私に適切な指導・助言をしていただいた歴代所長の先生方、授業にゼミに、そして学習相談にと、学生のために親身に対応していただいた先生方、私の業務要請に対し要求以上の結果を出してくれた職員のみなさん、ありがとうございました。また、学習センターの数々の行事にご支援・ご協力をいただいた東京多摩同窓会のみなさまにも深く感謝申し上げます。そして今日に至るまでの家族の支えにも感謝です。

昨春からのこの 1 年はコロナ禍対応が学習センターのかつて経験のない重要な業務となってしまいました。感染拡大防止のために長期間にわたり施設の利用制限等を実施するなど、今も学生さんにも先生方にも多大なご不便、ご迷惑をおかけしており心苦しい 1 年となってしまいました。しかし、現在も多摩 SC 関係者からひとりの感染者も確認されていないことは本当に幸いです。一日も早くコロナ禍が収束し、以前のように学生さんが集い、活気ある学習センターの日常が戻るよう願っております。

最後に、皆様のご健勝と東京多摩学習センターの益々の発展を祈念して、感謝のことばといたします。



ご卒業・ご修了おめでとうございます！

2020 年度第 1 学期 卒業証書・学位記授与式

2020 年 9 月 27 日(日)
卒業生 77 名 出席者 23 名



◆面接授業やゼミで授業が終わったあと先生にいつもお付き合いいただいたこと、またサークル活動を通じて多くの学友ができたことが最大の喜びです。

◆日々、学べることがありがたかったです。

◆日々の勉強や単位認定試験等大変でしたが、多くのことを学べて充実した時間を過ごしました。

ご入学おめでとうございます！

2020 年度第 2 学期 入学者の集い

2020 年 10 月 4 日(日)
出席者 65 名



◆放送大学への入学を自身の人生の一つの転機としたいと希望に胸を膨らませております。

◆学びたいと思う人がこんなにいるのかと心強く感じました。

◆これからの学生生活、とてもワクワク楽しみでおります。



新事務長 ご挨拶

東京多摩学習センター事務長 田口 清美

4 月から東京多摩学習センターの事務長に就任しました田口と申します。

一橋大学を定年退職後、この度事務長職を拝命することとなり、身が引き締まる思いです。

学生の皆様、特に新入生の皆様は放送大学の学習の仕組みや学習センターの利用などで、わからないことがあるかと思いますが、気軽にお問い合わせください。また、改善してほしい点など気づいたことがありましたら、小さなことでも結構ですので、声掛けしていただけたらありがたいです。

五味所長のもとで事務室スタッフが一丸となって、快適に利用できる入学してよかったと思っただけの学習センターになるよう頑張る所存ですので、よろしくお願いいたします。



■今号の表紙について

<作品詳細>「多摩の風景 9－御岳山－」2021 年、274×190、水彩紙、鉛筆、色鉛筆、水彩

<作 者> 東京多摩学習センター図書室・視聴学習室担当職員 齋藤文孝(さいとう ふみたか)

<絵について>

雪間から、水の流れや岩、大地の草土が顔を出している。厳冬をこえ、新たな季節を待ち望む春の季語(雪間)である。雪間の春。ことばに学ぶ。

御岳山は古来より人々のくらしと深く関わり、遍く知られ、広く多くの人々に親しまれてきた御山である。山上周辺には、二つの名瀑があり、その間約 1.5 km が、ロックガーデンと呼ばれる自然散策路となっている。広葉樹に囲まれた山峡には、大小様々な岩石の間を縫うように清流が流れ、深山に清き水音が響いている。

いにしえの人々もこの山道を歩きあの滝を見た。未来の人々もこの山道を歩きあの滝を見る事だろう。見上げると、高き御山に昇る月の光が心に残った。悠久の時を経て光り続ける御山である。

(図書係：齋藤)